

目 次

第1日 9月30日(土)

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) A会場 (L201 講義室) 1
司会：久保田 聡・由比 俊行

1. 「故郷」を結ぶアウトバーンの旅—K. H. ヴァッガー『帝国
アウトバーンの聖霊降臨節の牧歌』と戦後の改作をめぐって 杉山 有紀子
2. 「グロテスクな笑い」の再考察
—カール・ファレンティン『芝居見物』を例に— 撰 津 隆 信
3. ナチ期エルンスト・ユンガーの「反人文主義」的思考
—『放射』における「人間性をめぐる距離の美学」について 稲 葉 瑛 志
4. 落下と接近—エルンスト・ユンガー『冒険心』における立体的
認識と落下の関係について 内田 賢太郎

口頭発表：ドイツ語教育／文化・社会 (10:00~12:35) C会場 (K110 講義室)
..... 4
司会：高池 久隆・原 千史

1. 文法規則の明示的説明の効果
—冠詞の変化および定動詞の位置に関する実証研究— 太 田 達 也
Elvira Bachmaier
2. Animationen in der Grammatikvermittlung und ihre Möglichkeiten
im Unterricht Luisa Zeilhofer
3. ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について
—精神分析の生成— 金 関 猛
4. 青年音楽運動における境界線の再編制
—党派・宗派・家庭から民族へ— 牧 野 広 樹

ポスター発表 I (13:00~14:30) F会場 (K105 講義室) 7
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Sprachlernspiele – ein Unterrichtsmittel mit hohem Pädagogischem
Potenzial – Teil 5 Marco Schulze

ポスター発表Ⅱ (13:00～14:30) G会場 (K106 講義室) …………… 8
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Der Mythos lebt! —現代におけるニーベルンゲン伝承の諸相 野内清香
Forschungsprojekt zur Deutschförderung unter Berücksichtigung
von Mehrsprachigkeit an der DSTY Nina Kanematsu, Ruben Kuklinski

ブース発表Ⅰ (14:30～16:00) D会場 (K101 講義室) …………… 10
(ブース発表は途中での出入り自由です)

独検およびCEFRに対応したドイツ語単語帳および単語練習
アプリケーション作成について 川村和宏

ブース発表Ⅱ (14:30～16:00) E会場 (K102 講義室) …………… 11
(ブース発表は途中での出入り自由です)

語学教育の方法をいかしたドイツ文学講義の試み
—教養科目でどのように文学を取り上げることができるか— 熊谷哲哉

口頭発表：文学Ⅱ (14:30～17:05) A会場 (L201 講義室) …………… 12
司会：館野 日出男・松尾 博史

1. Pazifikismus. Vorschläge für eine literaturgeschichtliche Revision
Thomas Schwarz
2. アイヒェンドルフ作品における誘惑するシュピールマンと
その詩学的意味 水守 亜季
3. クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの寓話
—諧謔と教訓と子ども観をめぐって— 小林 英起子
4. 後期ヘルダーリンの詩作とバタイユのエロティシズム
—神への企てとしての侵犯の思考 益 敏郎

口頭発表：語学（14:30～17:05）B会場（K210 講義室）……………15

司会：最上 英明・依岡 隆児

1. ドイツ語における Operator-Skopus 構造に関する一考察
—19世紀の書きことばを対象として 細川 裕 史
2. ドイツ語の分裂文の照応性と対照性—対照言語学的観点から 山崎 祐 人
3. 二つの Origo と視点 瀧田 恵 巳
4. ドイツ語の主要部パラメータと語強勢 稲葉 治 朗
時崎 久 夫

口頭発表：文学Ⅲ（14:30～16:25）C会場（K110 講義室）……………17

司会：大杉 洋・Anette Schilling

1. 「待つ」ことにおける時間の美的構造
—《トリスタンとイゾルデ》を例として 北川 千香子
2. フランツ・カフカ『リヒャルトとザームエル』における
映画と創作の関係性 山口 知 廣
3. Das Land verlassen—Inseln als Flucht- und Zielpunkt: Gesellschaftskonstruktionen
auf einem Isolations- und Schutzort am Beispiel von Lutz Seilers indirektem
Wende-Roman „Kruso“ (2014) Andreas Wistoff

第2日 10月1日(日)

シンポジウムⅠ (10:00~13:00) A会場 (L201 教室)20
晩年のスタイル

Spätstil

司会：香田 芳樹

1. 「よちよち歩きの時分から柵のところまで」
—ヨーロッパ中世における老年描写 香田 芳樹
2. 自己と向きあうゲーテ —若返りと老いの物語 山本 賀代
3. 「ヴァイオリン協奏曲ニ短調」にみるローベルト・シューマン
の晩年様式 船木 篤也
4. スターティング・オーバー —シュティフター『曾祖父の書類綴じ』
最終稿における文化的共同性 磯崎 康太郎

シンポジウムⅡ (10:00~13:00) B会場 (K210 教室)24
中世文学における身体描写の逆説的レトリックを巡って

**Zur paradoxen Rhetorik der Körperdarstellungen in der mittelalterlichen
Literatur**

司会：伊藤 亮平

1. ミンネザングにおける身体描写 伊藤 亮平
2. 我は生きながらにして死せる身なり (ich bin mit lebendem lîbe tôt.)
—『トリスタン』における生と死をめぐる逆説的レトリック— 渡邊 徳明
3. 『パルツィヴァール』における異教徒の身体 青木 三陽
4. 身体描写と笑い 嶋崎 啓
5. ワーグナーの楽劇におけるグノーシスの快樂の身体性について
—『トリスタンとイゾルデ』と『パルジファル』を手がかりに 山崎 明日香

シンポジウムⅢ (10:00~13:00) C会場 (K110 教室)29
Erinnerungsliteratur nach 1945. Medien, Kontroversen, Narrationsformen

Moderator：Markus Joch

Kentaro Kawashima

1. W. G. Sebalds Archiv und Zeuge Markus Joch
2. Grenzen der Wahrheitsliebe. Selbstdarstellungen
nach 1945 (Andersch, Benn) Markus Joch
3. Fehlgeleitete Rache. Erinnerung an Gewalt in Günter Grass'
„Im Krebsgang“ und Heinrich von Kleists „Penthesilea“ Yoshiko Hayami

ブース発表Ⅲ (10:00～11:30) D会場 (K101 講義室) ……………32

(ブース発表は途中での出入り自由です)

多文化社会 EU の理解を重視した、高校における非英語外国語教育
導入授業の試み —東北大学での取り組みに関する中間報告— 藤田 恭子

第1日 9月30日(土)

口頭発表：文学 I (10:00～12:35) A会場 (L201 講義室)

司会：久保田 聡・由比 俊行

1. 「故郷」を結ぶアウトバーンの旅

—K. H. ヴァッガール『帝国アウトバーンの聖霊降臨節の牧歌』と
戦後の改作をめぐって

杉山 有紀子

カール・ハインリヒ・ヴァッガールの『帝国アウトバーンの聖霊降臨節の牧歌』Pfungstidyll an der Reichsautobahn (1941, 以下『牧歌』と記載)は、アウトバーン建設を主導した F. トートの依頼によりプロパガンダの一環として書かれたテキストで、作者は戦後これを改訂し『聖霊降臨節の旅』Die Pfungstreise(1946)として発表した。本発表ではこれら二つのテキストの比較検討を行う。ナチス・ドイツのアウトバーン計画は自動車交通の促進という実際の側面に加え、近代技術と郷土の風景の調和も追求し、さらに「一つの民族、一つの帝国」としてのドイツ各地及びオーストリアの結合というイデオロギー的意義も持っていた。オーストリアの郷土作家としてナチスの支持を受けていたヴァッガールによる『牧歌』のアウトバーン賛美にはそうした理念が取り入れられている。戦後改作された『聖霊降臨節の旅』は、『牧歌』と表面的には多くの共通点を持つ。しかし『牧歌』においては、旅の舞台となるアウトバーンで結ばれた広い帝国の全体が故郷あるいは「祖国」として讃えられるが、『聖霊降臨節の旅』での故郷は自らの本来属するごく狭い世界として捉えられ、異郷での不安に対比される。戦後のこうした故郷概念の変化の背景には作者自身、そして自らの生きる世界をナチス・ドイツから徹底的に切り離し、遠ざけようとする意図もあったことがうかがえ、戦後オーストリアにおける国民意識、及び対ドイツ意識の変化を示唆するものとなっている。

2. 「グロテスクな笑い」の再考察

—カール・ファレンティン『芝居見物』を例に

摂津 隆信

本発表の目的は、カール・ファレンティンの喜劇『芝居見物』(1933)を読解することで、グロテスクという馴染みがありながらも実際はその正体が不明瞭

な概念に新たな光を照射し、様々な相貌を見せるファレンティン喜劇の「滑稽」を浮かび上がらせることにある。

ファレンティン喜劇は「グロテスク」と形容されることが多い。しかしカバレットや小劇場で活躍し、一般市民の日常を描いたそれをカイザーやバフチンのようなグロテスク論と直結させることはできない。それはむしろ、メイエルホリドが言うような、「日常生活を、現実のものとは思えなくなるまで掘り下げる」演技で「対立物のエキスを総合し、未曾有な光景を現出し、観客を不可解な謎の解明へ立ち向かわせる」ものである。

ファレンティンにとっての日常とは中産市民の文字通りの生活、そしてその舞台上で掘り下げられるのは普段使用される言葉である。すなわち、通常何気ないものとして見過ごされがちな現象を白日のもとに晒し、それらを自らの芸芸と気まぐれを通して芸術作品へと仕立て上げるのがファレンティン流のグロテスクである。

このような解釈によって、美学上重要な概念の一つである「グロテスク」に新たな見方を与え、同時にこれまで見過ごされがちなファレンティン喜劇の価値を新たに示すことができる点に、本発表の意義があるといえるだろう。

3. ナチ期エルンスト・ユンガーの「反人文主義」的思考

—『放射』における「人間性をめぐる距離の美学」について

稲葉 瑛志

本発表は、ナチ期に執筆されたエルンスト・ユンガーの日記『放射』(1949)をドキュメントとしてではなく文学化されたテキストとして読む視座を示し、黙示録的イメージを生むユンガーの思考回路を、詩人の「人間性をめぐる距離の美学」という文化批判的・政治的観点から明らかにする。

『放射』執筆時のユンガーは、非ナチ的・倫理的態度から内的亡命作家として解釈されてきた。しかし、彼の思考には19世紀来の「反人文主義」の精神史において危機の瞬間に呼び起こされてきた *Verlorener Posten* のトポスが、「創造的破壊」の美的パースペクティヴと密接に絡み合っている。その光景には、文化的危機の「大渦巻」に抗う作者の英雄的身振りが確認できるのだが、作者のパースペクティヴは、事件に介入する当事者の位置から、破局から絶対的距離をとる無傷の観察者の位置へと移行される。破局の光景を、犠牲となる大衆の没落劇という美的光景として描く視線には、作者と同じ人間性の位階を他者に認めない「反人文主義」の思考が内在する。それは、他者から精神的絶対距離を保持し、彼らの破局・没落を不可避なものとして待望する保守的知識人の

倒錯的・「英雄的」思考法である。このように本発表は、『放射』のユンガーの思考回路を解明すると同時に、ブルクハルトからシュペングラーに連なる「反人文主義」的思考に内在する美的政治態度を射程におさめながら精神的考察を行う。

4. 落下と接近—エルンスト・ユンガー『冒険心』における 立体的認識と落下の関係について

内田 賢太郎

E.ユンガーは思索日記風のエッセー『冒険心 第一稿』(1929)一冊を通じて、立体的認識という独自の認識論を考案し、その方法論および可能性を展開している。この認識論をごく簡単に述べれば、現象を表層と深層の二層に分け、その深層の「始原的なもの」を直視することとも言え、同時代人の認識論や思考とも少なからぬ共通点を持つ。立体的認識をめぐるこの基本的な見解は、研究史を眺めても一致している。加えてそれは、『冒険心』の主要テーマの一つと、またユンガーの終生一貫して追い求めたテーマである「見ること」の最初の理論的な取り組みとも見なされている。しかしながら、この認識論の内実、またこの方法を持ってして、いかにして始原的なものを見るのかは、いまだ見解がわかれており、議論が熟していないのが現状である。本発表では、ユンガーの認識の前提とも見なされるなど、立体的認識と密接な連関を持つとされ、K.H.ボーラー『驚愕の美学』以降、特に重要視されている驚愕のモチーフを扱う。ユンガーが驚愕の例として『冒険心』中で挙げている「ブリキ板の落下モデル」を、ボーラーの解釈を参照、また検討しつつ分析し、「落下」「驚愕」「認識」といったモチーフの相関を検討する。このような分析を通じて、ユンガーの認識の姿勢を示すことが、本発表の目的となる。

口頭発表：ドイツ語教育／文化・社会（10:00~12:35）

C会場（K110 講義室）

司会：高池 久隆・原 千史

1. 文法規則の明示的説明の効果—冠詞の変化および定動詞の位置に関する実証研究

Welche Wirkung hat die explizite Erklärung grammatischer Regeln?—
Eine empirische Untersuchung in Bezug auf Artikeldeklinaton und
Verbstellung

太田達也（Tatsuya Ohta）

Elvira Bachmaier

日本のドイツ語教育では、文法規則を明示的に教えその知識の定着を図るための練習を行うことで言語習得を促す方法が広く実践されている。しかしながら、コンテキストから切り離して文法規則の明示的説明にのみ焦点をあてた指導法がどの程度の持続的効果をもたらすかについては、日本のドイツ語教育研究の分野においてまだほとんど実証研究が行われていない。そこで発表者は、以下のようなデザインに基づく擬似実験を国内2つの大学の授業環境において実施した。

- 1) 事前テスト（「冠詞の変化」および「定動詞の位置」の知識を測る問題）
- 2) 「冠詞の変化」および「定動詞の位置」に関する明示的説明と練習の1回目（事前テスト直後）
- 3) 明示的説明と練習の2回目（事前テストの1週間後）
- 4) 事後テスト1（事前テストの2週間後）
- 5) 事後テスト2（事後テスト1の9週間後）

発表では、「冠詞の変化」および「定動詞の位置」の知識を測るそれぞれ3回のテストの点数を統計的に分析した結果を紹介し、明示的指導を行ってもその項目の習得にほとんど効果が現れないのはなぜかについて考察する。

Im Vortrag werden die Ergebnisse einer empirischen Untersuchung unter japanischen Deutschlernenden vorgestellt, welche die Wirkung expliziter Erklärung von Artikeldeklinaton und Verbstellung anhand eines Quasi-Experiments erforscht. Vortragssprache ist überwiegend Japanisch mit Präsentationsfolien auf Japanisch und Deutsch.

2. Animationen in der Grammatikvermittlung und ihre Möglichkeiten im Unterricht

Luisa Zeilhofer

Animationen helfen verschiedene Thematiken der (deutschen) Grammatik zu veranschaulichen und bieten somit Vorteile bei der Fremdsprachenvermittlung. Ein besseres Verständnis durch Animationen ist beispielsweise zur Wahl des Kasus nach Wechselpräpositionen, der richtigen Passivverwendung und der geeigneten Wahl der Modalverben zu erreichen. Dies geschieht durch „Mentale Modelle“, die aus der kognitiven Linguistikforschung übernommen werden und mit einer möglichst korrespondierenden äußeren Repräsentationsform veranschaulicht werden. Mit ihrer Studie zur Vermittlung deutscher Wechselpräpositionen legte Scheller (2008) als erste empirisch gestützte Daten zum Animationseinsatz im Bereich der Sprachvermittlung vor. Die dafür entwickelten Animationen stützen sich auf Konzepte der kognitiven Grammatik (Langacker 1986/1999) und die Erkenntnis, dass Animationen besonders „zur Darstellung sequenzieller oder kausaler Sachverhalte“ geeignet sind, da sie Veränderungen explizit hervorheben können (Roche 2008). In meiner Validierungsstudie (Zeilhofer 2017) konnte ich zeigen, dass Animationen, denen ein kognitionslinguistisch durchdachtes Konzept zugrunde liegt, im Gegensatz zu traditionellen Didaktisierungen auch an japanischen Universitäten einen Mehrwert bei der Grammatikvermittlung besitzen. Zudem ist es mir ein Anliegen zu zeigen, dass eine Animierung allein nicht ausreicht und ein kognitives Konzept unerlässlich ist. Im Vortrag werden unterschiedliche Animationen gezeigt, inklusive eigener entwickelter Animationen. Darüber hinaus sollen Beispiele aus der Praxis präsentiert werden.

3. ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について —精神分析の生成—

金関 猛

フロイトは1882年6月17日に、マルタ・ベルナイスと婚約する。二人の結婚は86年9月13日なので、婚約期間は4年3ヶ月にわたった。二人はウィーンで知り合ったのだが、婚約直後にマルタは母とともにウィーンを離れ、ハンブルクで暮らすことになった。そして、その間、二人は毎日のように手紙を交わしていた。2011年にこれを活字化した往復書簡集 (*Brautbriefe*)の刊行が開始された。現在、第3巻まで刊行されており、全5巻で完結予定である。本研

究発表では、フロイトのマルタ宛の手紙と、それから 30 年以上経って書かれた論文「ミケランジェロのモーセ像」(1914 年)を比較し、まだ精神分析とは無縁であったはずの 20 歳代後半にすでにフロイトの内で精神分析が生成していたことを論証する。

「ミケランジェロのモーセ像」はフロイトが精神分析の方法を芸術作品に応用した論文である。論文の冒頭、フロイトは、芸術作品に対する態度としては不適切であると自覚していると認めつつ、自分は作品の「形」ではなく、「内容」に惹かれるのだと告白する。一方、マルタ宛の 1882 年の手紙で、フロイトはマルタの写真を見ながら、自分は恋人の「形の上での美しさ」には興味がなく、そこからその心中を「解釈する」ことが自分の関心事なのだと述べている。精神分析家としてのフロイトが彫刻に向ける視線と、青年フロイトが恋人に向ける視線は一致する。『婚約書簡』は精神分析におけるフロイトの根本姿勢を先取りする。精神分析の源泉には、その創始者のエロス化するロゴスがあった。

4. 青年音楽運動における境界線の再編制

—党派・宗派・家庭から民族へ

牧野 広樹

青年音楽運動は、20 世紀初頭の青年運動内部で興隆した、合唱や簡単な器楽合奏などの音楽活動に特化した運動である。フリッツ・イエーデ (Fritz Jöde, 1887–1970) は、この青年音楽運動の中心人物の一人であるが、彼についてはこれまで主として音楽教育学の観点から研究が行われてきた。本発表では、戦間期ドイツにおける彼の著作をとりあげ、彼がなにを目的として共同の音楽実践に従事したのか、その社会的目的を考察する。

アトム化の進む社会状況のなかで、孤立する人間が相互の関係を取り戻すための試みとして始まったイエーデの活動は、民衆音楽学校の設定に際して、次第に「民族 (Volk)」という枠組みを意識するようになる。そしてナチスドイツ成立後、イエーデは、それ以前の「青年音楽 (Jugendmusik)」を、党派や宗派、家庭という境界線を解体し、それを民族というより広い概念へと拡張する試みであったと位置づけている。しかしながら、ナチ政権への順応として、彼が回顧的に自身の活動の自己正当化を図った可能性は否定できない。このことを鑑みると、イエーデが活動当初から「民族の統合」という社会的目的をどの程度明確に持っていたかという点、そしてその社会的目的がナチスの思惑と重なるものであったかどうかという点には、留保を付さねばならない。

以上を踏まえたうえで、本発表では、イエーデにおける„Volk“の多層性や、

彼の打ち出した未来へのヴィジョンについても考察する。

ポスター発表 I (13:00~14:30) F会場 (K105 講義室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Sprachlernspiele—ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischem Potenzial— Teil 5

Marco Schulze

In der Poster-Präsentation möchte ich, auf den Inhalt meiner vorangegangenen Präsentationen aufbauend, meine Forschungsschritte zum obigen Thema vorstellen und diskutieren. Dafür werde ich die Ergebnisse eines mehrteiligen Feldexperimentes, welches ich mit japanischen Studenten in Japan (August) und in Österreich (September) durchführen werde, vorstellen. Es soll experimentell erforscht werden, inwieweit sich das Spieldesign, die Spielumgebung sowie die Anwesenheit bzw. Abwesenheit von Muttersprachlern als abschließende Kontrollinstanz in Bezug auf die „korrekte Anwendung“ der Zielsprache Deutsch auf das Spielverhalten von japanischen Studenten, deren Spielmotivation sowie deren Spielbeurteilung auswirkt. Dabei sollen sowohl Spiele verwendet werden, die von deutschen Bildungseinrichtungen verwendet werden, als auch Spiele, welche in japanischen Lehrwerken für den universitären Deutschunterricht zu finden sind. Das Ziel des Experimentes ist es herauszufinden, welche Formen von Spielen für den Unterricht an japanischen Universitäten geeignet sind und welche Kriterien sie erfüllen sollten, damit möglichst das gesamte Potential einer „spielerischen“ Auseinandersetzung mit der Sprache Deutsch ausgeschöpft werden kann. Für die Datengewinnung werde ich sowohl Fragebögen verwenden, als auch Einzelinterviews durchführen sowie Gruppendiskussionen initiieren. Auf dem Poster werde ich mittels graphischen Übersichten versuchen, die unterschiedlichen Bereiche und Ergebnisse des Experiments übersichtlich darzustellen.

ポスター発表Ⅱ (13:00~14:30) G会場 (K106 講義室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Der Mythos lebt! —現代におけるニーベルンゲン伝承の諸相

野内 清香

「神話は生きている Der Mythos lebt!」—2001年に開館した、『ニーベルンゲンの歌』の舞台ヴォルムスのニーベルンゲン博物館のミュージアムショップの紙袋にはそう書かれている。その言葉通り、「ニーベルンゲン」をめぐる神話ないし伝承は、ゲルマン民族大移動期の歴史的な事件から発生したのち、地域や時代ごとに様々に語り継がれ、文芸や音楽、絵画等の芸術作品に素材を提供してきた。中世の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と、19世紀楽劇『ニーベルンゲンの指環』4部作という二つの記念碑的作品を筆頭に、現代でもこの伝承を素材とする作品の数は数えきれないほどである。加えて現代のニーベルンゲン伝承の受容は、「過去の神々や英雄や貴婦人たちについての物語」として伝説そのものが語り継がれ変化してきた、かつての受容のあり方とは少々異なる様相をも含んでいる。また伝説の舞台においては、文学や芸術の枠に留まらない独特な受容文化が育まれている。従来のみが研究対象たりうる文芸・芸術作品にとどまらず、ゲームやコミック、アニメーション等のより雑多な範囲も視野に含めつつ、常に前進し続けるこうした現代のニーベルンゲン受容のあり方について、「a. 既存の叙事詩や戯曲の再現」「b. 伝承を素材とした新たな創作」「c. ネーミングやモチーフの断片的な利用」「d. 観光資源や展示物」という、四つの観点からの分類を試みる。

Forschungsprojekt zur Deutschförderung unter Berücksichtigung von Mehrsprachigkeit an der DSTY

Nina Kanematsu, Ruben Kuklinski

Das Kooperationsprojekt an der Deutschen Schule Tokyo Yokohama (DSTY) zwischen DaZ-, Deutsch- und Fachlehrkräften sowie DaF-Lehrenden an mehreren Universitäten setzt es sich zum Ziel, durch die Analyse von Schüler/innen-Texten passgenaue Förder- und Unterstützungsmaßnahmen für die Lernenden an der DSTY zu erarbeiten und zum wissenschaftlichen Diskurs über den Erwerb von Deutsch als Zweitsprache und Mehrsprachigkeit beizutragen. Für den Deutschunterricht in Japan besitzt die Studie Relevanz, da aufgrund der Zusammensetzung der Schülerschaft

Parallelen zur Situation an japanischen Universitäten und Oberschulen bestehen.

Während umfangreiche Fachliteratur sich mit dem Erwerb von Deutsch als Zweitsprache im Kontext von Migration beschäftigt, wird hier die spezielle Situation an einer Auslandsschule untersucht. Im ersten Schritt wurden Lernbiographien erhoben, um einen Überblick zum sprachlichen Hintergrund der Schüler/innen und ihren subjektiven Einstellungen zu ihren Sprachen zu gewinnen. Die Lernbiographien wurden sowohl nach sprachlichen als auch nach inhaltlichen Kriterien untersucht. Erste Ergebnisse lassen unterschiedliche Tendenzen in der schriftlichen Textproduktion bei Schüler/innen mit indoeuropäischen vs. nicht-indoeuropäischen Erstsprachen erkennen. Auch mögliche Einflüsse von peer groups und "Sprachprestige" sowie Maßnahmen zur Förderung von "Sprachbewusstheit" (language awareness) sollen Gegenstand längerfristiger Forschung sein. In weiteren Schritten sollen unterschiedliche Texte der Schüler/innen aus dem Deutsch- und Fachunterricht analysiert werden.

Weitere am Projekt Beteiligte:

Diana Beier-Taguchi, Bettina Gildenhard, Anke Hohenauer, Eva Koizumi-Reithofer, Maria Rauhut, Silke Sachs, Michael Schart, Karin Yamaguchi, Nancy Yanagita

ブース発表 I (14:30~16:00) D会場 (K101 講義室)
(ブース発表は途中での出入り自由です)

独検および CEFR に対応したドイツ語単語帳および単語練習アプリケーション
作成について

川村 和宏

本発表では「スマートフォン用ドイツ語単語練習アプリケーション」の開発およびこのアプリケーションのための語彙データベース作成に関して報告し、スマートフォン等を利用した教育方法について議論したい。

いわゆるアプリを活用したドイツ語の単語学習については、橋本氏による「シンプルドイツ語単語帳」をはじめとして、すでに多様な試みがある。

本発表の特色としては、ドイツ語技能検定試験(独検)5級~3級およびヨーロッパ共通参照枠(CEFR)A1~A2の語彙データベースに基づいて、頻出度順で練習できる単語練習アプリケーション(下図:画面は開発中のもの)を開発したことが挙げられる。

発表前半で主張したいテーマは、頻出度順で自動的に出題、発音再生される形式の有用性である。アプリケーションの操作画面等を投写して、開発の経緯を報告する。

後半で主張したいテーマは、CEFRと独研を包括した語彙データベースの必要性である。近年、一方でCEFRに準拠した授業の整備、海外研修の単位化等が求められる場面もあるが、他方で学生の目標としてはやはり独研が実際的な選択肢となっている。こうした状況下でCEFRと独研双方に対応した語彙を整理して単語帳を作成した経緯について報告する。

ブース発表会場には試作版をインストールした端末を複数用意し、これらを参加者が随時試用可能として議論を深めたい。さらに、紙媒体の単語帳も試作しているため、これについても紹介したい。



ブース発表Ⅱ（14:30～16:00） E会場（K102 講義室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

語学教育の方法をいかしたドイツ文学講義の試み —教養科目でどのように文学を取り上げることができるか—

熊谷 哲哉

本発表では、文学テキストを使った講義科目において、どのように語学教育の手法を生かすことができるかという課題に関して、「国際化と異文化理解」という講義科目における、授業の実践について報告する。

ドイツ語教員が担当する授業は、語学科目だけではない。多くの教員が、ドイツ文化や外国文学などの、教養講義科目も担当している。しかし、文学部以外の場で、ドイツ文学やドイツ文化をどのように講義すべきかについては、ほとんど先行研究がない。ドイツ語教育の分野においては、アクティブ・ラーニングのように授業手法の改善は活発に行われているのに対し、講義科目においてはクラスサイズや分野の違いなどから、手探りの状態が続いている。

発表者は、「国際化と異文化理解」の講義において、ゲーテやカフカなどドイツ文学の主要なテキストを教材として取り上げ、学生自身がテキストを読んで、歴史的背景や作品の内容、考えをまとめるといった3、4個の課題に答える形式の授業を行った。語学の授業と同様に、学生に課題を与え、机間巡視やフィードバックなどの働きかけを通じて、学生自身が自律的に思考し、書くことを目指した授業プログラムを作成した。その結果、アンケートでは多くの学生から好意的な意見を得ることができた。今回の発表では、講義における工夫を紹介し、来聴者とのディスカッションを通じて、講義科目運営における課題について考察を深めたい。

口頭発表：文学Ⅱ（14:30～17:05） A会場（L201 講義室）

司会：舘野 日出男・松尾 博史

1. Pazifikismus. Vorschläge für eine literaturgeschichtliche Revision

Thomas Schwarz

Die Forschung über die deutsche Pazifik-Literatur bedarf einer Revision. Notwendig ist eine kritische Umwertung aus postkolonialer Perspektive, die beim positiven Urteil Stefan Zweigs über Magellan (1938) beginnen sollte. Literaturgeschichtlich muss der Beginn der präkolonialen Phase auf die erste Hälfte des 18. Jahrhunderts vordatiert werden. 1728 erscheint ein Reisebericht von Carl Friedrich Behrens, der die Weltumsegelung einer holländischen Expedition schildert und wichtige Motive der Südsee-Literatur präfiguriert (Kannibalismus, Paradies-Mythos, sexuelle Gastfreundschaft).

Flankierend zu Klassikern wie Forster oder Chamisso muss der Kanon mit Reiseberichten aus dem Vorderdeck ergänzt werden. Lukas Hartmanns Roman "Bis ans Ende der Meere" (2009) über Cooks dritte Reise richtet die Aufmerksamkeit auf ein Diarium Heinrich Zimmermanns, eines deutschen Matrosen auf der „Discovery“ (1781).

Die Kolonialliteratur über die deutsche Südsee ist eine Forschungslücke. Der kolonialrevisionistische Autor Erich Scheurmann, Verfasser des „Papalagi“ (1920), sollte aus dem interkulturellen Lesekanon entfernt werden. Dass Samoa noch eine Rolle im kulturellen Gedächtnis spielt, verdankt sich dem Interesse für Stevenson, das sich beispielsweise in einem Roman von Alex Capus (2005) niederschlägt. Eine Reihe von neueren Romanen, für die exemplarisch Christian Krachts "Imperium" (2012) steht, rückt auch den Kolonialismus des Kaiserreichs in der Bismarcksee ins Rampenlicht.

2. アイヒェンドルフ作品における誘惑するシュピールマンとその詩学的意味

水守 亜季

本発表はアイヒェンドルフ作品の重要なモチーフの一つ「誘惑」に関して特に先行研究での言及が著しく少ない、誘惑するシュピールマン(Spielmann)の形姿に着目する。アイヒェンドルフの抒情詩や散文作品では、ヴィーナス、セイレーン、水の精など伝説上の女性形姿に、男性の詩人形姿が誘惑される様が繰り返し描かれる。その一方で伝説的な男性の詩人形姿であるシュピールマンもまた彼の作品では一度ならず誘惑する者として表れる。シュピールマンは19世紀のドイツ語文学と文学的議論において「民衆文学」の担い手として肯定

的な形姿と理解された。しかしアイヒェンドルフ作品の誘惑するシュピールマンはアンビバレントな様相を呈する。初期の抒情詩や散文作品では他者を誘惑する者として描かれる傾向が強いが、中期以降、誘惑するシュピールマン形姿は自らを惑わす存在として描かれる。自身を惑わす詩人という表現を通じて、詩人が詩作の対象となる世界に耽溺する危険と自らの詩作したものに自己愛的に耽溺する危険とにさらされていることが暗示され、詩人のあるべき姿が逆説的に示されるのである。具体的には、初期の詩 „Der zauberische Spielmann” と „Der irre Spielmann”, 初期から中期にかけての散文作品におけるシュピールマンについての描写を例として挙げるが、アイヒェンドルフ作品の誘惑の構図を示すために部分的に女性の誘惑する形姿にも言及する。

3. クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの寓話 —諧謔と教訓と子ども観をめぐって—

小林 英起子

クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセ(1726-1804)はドイツ近代児童文学の父として知られる。本研究では、ザミュエル・ゴットロープ・フリッシュ編集の『クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの子ども達と若者のための歌と寓話』(1804)とアンネ・クリスティン・マイによる『クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの伝記概観と作品選集』(2003)に所収されている寓話と散文作品を考察の対象とし、彼の代表的な寓話作品において基調となる諧謔、教訓、子ども観、さらには背景にある博愛精神について論じたい。

ヴァイセの児童文学が当時の社会教育へ及ぼした影響については B.フーレルマンの先行研究(1974)があり、彼の「子どもの友」における美学的教育者としての創作姿勢については、W.パーペによる『文学的な子どもの本』(1987)の研究があるが、ヴァイセ寓話に関する研究はほとんどなされていない。寓話文学が隆盛した啓蒙時代における彼の寓話の位置付けと児童文学としての特色を検討してみる。

本発表では、ヴァイセ寓話では (1)イソップ翻案は少なく、ドイツの家庭や裏庭で見かける身近な生き物が諧謔の語り口で擬人化された創作寓話や歌が多い。(2)生き物を対比したり、優劣をめぐる競争と生々しく残虐な描写が見られ、痛みも伝える教訓が示されている。(3)教育者、師、父親の観点から理想とする子どもの姿を描いており、啓蒙的寓話からは、子どもや親に向けた博愛精神が認められる、という点を指摘する。

4. 後期ヘルダーリンの詩作とバタイユのエロティシズム

—神への企てとしての侵犯の思考

益 敏郎

ヘルダーリンとバタイユの比較という本発表の試みは、アプローチとしていささか突飛であり、ある面では挑発的でさえある。理由は、バタイユの著作にヘルダーリンへの言及がほぼ見られず、かたや敬虔な宿命詩人、かたや冒濫的で淫靡な神秘家、という両イメージがあまりにかけ離れていることである。とはいえバタイユをヘーゲル哲学の特異な継承者と見るならば、ヘルダーリンとの繋がりも自ずと見えてくる。実際、ディオニュソスの密儀や古代悲劇、犠牲死、神との脱自的關係など、彼らの着眼点は驚くほど似通っている。

バタイユはヘーゲル哲学から死と生、聖と俗に分かたれる二元的世界観を構築し、エロティシズムにおける禁止と侵犯の快樂的共犯關係をその基底に据えた。侵犯行為は、聖なるものや死への禁忌意識を抹消するのではなく、供儀や悲劇に見られるように、虚構として弁証法的に禁忌を強化する。一方、侵犯は虚構の反復可能性を通じて、聖なる領域の限界を事後的かつ構成的に画定する。

このような、神を限界づける企てとしての侵犯の思考は、現在に至るまで神々や祖国に対する敬虔さを基本的な方向性としつつ解釈されてきた後期ヘルダーリンの試みに、新たな視座を提供するだろう。神を蔑する英雄、禁忌を犯す詩人、それを自制する内省的詩人、さらには不可知不可触の神、背信の神、人間を必要とする有限の神など、それぞれ相矛盾するモチーフは、禁止—侵犯の關係を構築する個々の要素として、初めて包括的に理解されるのである。バタイユとの比較によって、ヘルダーリンの詩作は、常に神々への敬虔さに貫かれているにもかかわらず、詩作を通じて神々の領域を事後的に創造するという、本源的冒濫性を孕んでいることが明らかになるのである。

口頭発表：語学（14:30～17:05） B会場（K210 講義室）

司会：最上 英明・依岡 隆児

1. ドイツ語における Operator-Skopus 構造に関する一考察
—19 世紀の書きことばを対象として

細川 裕史

Fiehler u.a.(2004)などで話しことばに特徴的な統語構造とされた Operator-Skopus 構造は、近年、書きことばの分野にも普及しつつあると Duden (2009) は指摘する。本発表では、19 世紀の書きことばコーパスを対象とし、この統語構造を統計的に調査し、その歴史的な発展を明らかにする。その際、とくに、同構造の機能や文章のジャンルごとの使用頻度に注目する。

20～21 世紀の新聞のドイツ語を調査した Betz (2006) は、その他の話しことばの特徴にくらべ、Operator-Skopus 構造はより古い時代の新聞にも頻繁に見られたことを指摘している。本発表では、まず、この Betz (2006) に基づきながら、新聞メディアに見られる同構造を機能（「要約」「反証」「話題転換」など）ごとに整理・分類し、Hosokawa (2014) で作成した 19 世紀の新聞コーパスを対象に、同構造の使用頻度を機能別に統計調査した結果を紹介する。その後、発表者が過去に作成した 19 世紀の年代記コーパスおよび（19 世紀に文章語の規範とみなされていた）ゲーテの言語コーパス、19 世紀の文学作品コーパスを対象に行った同様の調査の結果と比較することで、19 世紀における同構造がどの機能において、どの文章のジャンルにおいて、どのていど使用されていたのかを明らかにする。

本研究の目的は、以上の調査をつうじて、Operator-Skopus 構造を近年「書きことば」に普及しつつある「話しことば」の特徴とする Duden の記述の妥当性を検証することである。

2. ドイツ語の分裂文の照応性と対照性—対照言語学的観点から

山崎 祐人

ドイツ語の分裂文には二通りの語順が存在する。本発表ではそれぞれを規範語順の分裂文 (z.B. Es ist Hans, der kommt.)、倒置語順の分裂文 (z.B. Hans ist es, der kommt.) とし、談話上の機能に応じて分裂文の語順が異なることを主張する。

先行研究では分裂文の代名詞は概ね虚辞 (vgl. Declerck 1988) もしくは関係

文と不連続の要素 (vgl. Hedberg 2000) とされてきた。しかしドイツ語の規範語順の分裂文は関係文を縮約した形でも WH 疑問文の答えとして用いられることから、代名詞 es は照応的に解釈されることが観察される。倒置語順の分裂文は同様の形式で答えとして用いられないため、代名詞 es に照応性はないと考えられる (z.B. Wer ist es? - Es ist Hans. vs. ??Hans ist es.)。一方、倒置語順の分裂文は対照的な解釈と関連していることが観察される (z.B. Nein, die Bürger selbst sind es, auf die es ankommt. (Zeit online, 23.02.2012))。このことから、分裂文の対照性と代名詞の照応性は相補関係にあることが導き出される。さらに本発表では英語とイタリア語との比較を試み、それぞれの分裂文の変種、およびその談話上の振る舞いを分裂文の照応性と対照性の相補関係から考察する。

3. 二つの Origo と視点

瀧田 恵巳

本研究発表では、従来一つと見なされがちな Origo が言語記号の機能によって二分され、その一方が視点と結びつくことを明示し、その有効性を実証する。

Bühler(1934)によると、Origo とは座標に見立てた指示場 Zeigfeld の Origo 「原点」で、Origo を代用する指示語 hier, jetzt, ich は話し手などの表現主体 (送り手) への注意を要請する。しかし Herbermann(1988)によると、hier, jetzt, ich は発話時点の話し手に密着するコンテクストでは不要であり、Klein(1978)による jetzt の例は一見発話時点を示すようで実はそうではない。こうした現象は、hier, jetzt, ich の表現内容と、発話地点、発話時、送り手が本質的に異なることを暗示している。

両者の相違は、言語記号の機能を「送り手」と「受け手」、そして叙述の対象である「対象と事態」との関連でとらえる Bühler (1934)の言語オルガノン・モデルにおいて明示される。つまり hier, jetzt, ich により叙述される「言語内の Origo」は「対象と事態」に位置づけられるが、叙述されない「送り手」に帰属する Origo はいわば「言語外の Origo」である。二つの Origo は、Fricke(2003)の言語調査において実際に共起し、さらに「言語外の Origo」と視点の結合が認められる。また Langacker(1985)が提唱するダイクシス表現に関する egocentric viewing arrangement の offstage と on stage は、言語上の明示・非明示を区別するものの、根本的な要因については不明である。しかし、二つの Origo と視点という概念を用いることにより、その叙述のメカニズムが明らかになる。

4. ドイツ語の主要部パラメータと語強勢

稲葉 治朗・時崎 久夫

英語や日本語などとは異なり、ドイツ語の主要部と補部の語順が一貫していないことについては、従来の研究では範疇を指定して区別するのみであった。本発表では、ドイツ語の主要部パラメータの値（主要部先行／主要部後行）はドイツ語の語強勢システムによって決定されるという提案をする。

ドイツ語の語強勢は、原則的に語頭であり (arbeiten)、いわゆる分離前綴りなど一部の接頭辞を除けば、接頭辞は強勢を持たない (be-arbeiten)。語におけるこうした無強勢（接頭辞）－語頭強勢（語幹）という強勢型は、句においても認められる。すなわち、冠詞 (die Leute)、前置詞 (nach München)、補文標識 (dass Johann ...) などの無強勢の機能語を主要部に持つ DP, PP, CP などがこれに該当し、よって、これらは主要部先行の語順を取る。これに対して、動詞、形容詞などの内容語は語強勢を持つため、接頭辞及び機能語とは異なり、主要部後行語順を取ることができる (Bücher lesen, [seinem Vater] ähnlich)。ここでいう語強勢はすぐれて統語部門の外、すなわち言語間の変異を避けることができない音韻部門において規定されるべきものであり、本発表における提案は、言語間の変異は統語部門外の要因によって説明しようという、近年の生成文法の理論的動向とも合致するものである。

口頭発表：文学Ⅲ（14:30～16:25） C会場（K110 講義室）

司会：大杉 洋・Anette Schilling

1. 「待つ」ことにおける時間の美的構造 —《トリスタンとイゾルデ》を例として

北川 千香子

ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》は、語らない、通じない、満たされない、解決しないといった、徹底した否定性に貫かれている。この作品は言葉の不在によって成り立つ「黙秘の悲劇」(H. Mayer, 1966)であり、語られることよりも黙されることが決定的な意味を持つ。この不在性というドラマトウルギー上の新機軸に、現代音楽への扉を開いたとされるこの楽劇の革新性の要諦がある (R. Elzenheimer, 2008)。こうした不在性の一形態として、本発表では「待つ」ことのドラマトウルギーに着目する。

対象が欠如した「待つ」という状態、そしてその主体のモノローグに比重が

置かれている点で、この楽劇は伝統的なドラマの形式から逸脱している。特に第3幕は、瀕死の状態でイゾルデを待つトリスタンのモノローグが大半を占める。本発表では、「待つ」主体の言語および音楽的構造に光を当て、「待つ」ことの内に生成される特殊な時間性について考察する。「待つ」主体においては、時間が伸縮したり異なる時間軸が交錯したりすることによって、直線的な時間が消滅し、主観的な時間が表出する。それは、19世紀終わり頃からベルクソンらによって盛んに議論されるようになった、時間と意識との関係の問題に呼応している。「待つ」ことにおける停滞する外的時間と、内的な「意識の流れ」(W. James)の美的構造についての考察を通して、この楽劇の革新性の一端を明らかにする。

2. フランツ・カフカ『リヒャルトとザームエル』における映画と創作の関係性

山口 知廣

フランツ・カフカ(1883-1924)にとって「見ること」と「書くこと」は大きな関心事であった。それゆえ彼が、当時登場したばかりの映画に興味をもったであろうことは想像に難くない。カフカの日記や手紙からは、彼が短期間ではあるが映画館に通っていたことが窺え、最初のカフカ全集のあとがきでは、作品と映画の印象の類似が指摘されている。しかし、カフカと映画に関する伝記的研究を初めて詳細に行った Hanns Zischler (1996) は、1911年2月の日記におけるカイザーパノラマの記述以降、カフカが映画から写真へと関心を行き移した可能性を指摘している。この見解はカフカと映画に関する現在の研究の主流となっており、Carolyn Duttlinger (2006) は、当時のカフカの日記の考察によって、Zischlerの主張を補強している。

しかしこの見解に関しては、カイザーパノラマの記述後のはじめての作品『リヒャルトとザームエル』に映画が登場すること、この作品が、Duttlingerが論拠として用いた1911年夏～秋のカフカの日記と深い関わりを持っていることから疑問が残る。『リヒャルトとザームエル』は、1911年夏にカフカが友人マックス・ブロートと行った旅を基にした未完の旅行記であり、ブロートとの共著として書かれた。本発表は、『リヒャルトとザームエル』に登場する映画に着目し、この作品をその素材となった旅日記と比較することによって、1911年2月以降のカフカにおいても、映画への関心と作品創作が関わりをもっていたことを論証する。

**3. Das Land verlassen—Inseln als Flucht- und Zielpunkt:
Gesellschaftskonstruktionen auf einem Isolations- und Schutzort
am Beispiel von Lutz Seilers indirektem Wenderoman „Kruso“ (2014)**

Andreas Wistoff

Seilers Roman arbeitet vielfach gespiegelt mit Motiven verschiedener Gruppen von Insel-Romanen: Von Thomas Morus' Staatsphilosophie „Utopia“ und Wilhelm Heineses „Glückselige Inseln“, über Daniel Defoes „Robinson Crusoe“ mit dessen Gefährten Freitag, die beide in „Kruso“ wiedererkennbar sind, bis zum Kulturpessimismus in William Goldings „Lord of the Flies“ reichen die Vorbilder bei der Frage, wie die Insel eine soziale tabula rasa für eine neue Gesellschaft mit kreativem Potential oder schlichtem Überlebenszwang bietet – als Ausweg, als ungestörter Entwicklungsraum eines natürlichen Vernunftstaates oder als Raum ungebremster Machtausübung.

„Kruso“ stellt einzigartig dar, wie mit Freiheit und Selbstbestimmung – den Hauptforderungen der Demonstranten in Ostdeutschland – im Mikrokosmos der Insel handlungs- und reflexionsbestimmend umgegangen wird: Gerade die Flucht ist nicht erstrebenswert an diesem historischen DDR-Fluchtort Richtung Dänemark, wo Freiheit unter Beobachtung der Staatssicherheit entsteht und die DDR zu einem sinkenden Schiff wird.

Untersucht werden die narrativen und motivischen Strukturen des Romans und die Frage, wie literarische Inselutopien in einem indirekten Roman über die politische Wende erscheinen. Wesentlich dabei ist das assoziative Erzählen über weite Strecken hinweg. Es gibt Anspielungen, literarische Zitate, Scheinzitate, skurrile Phantasien vermischt mit konkreten Situationen aus dem DDR-Alltag. Die Analyse der Erzähltechnik und ihre Einbettung in Erzählstrategien der Inselliteratur sind Gegenstand des Vortrags.

第2日 10月1日(日)

シンポジウム I (10:00~13:00) A会場 (L201 教室)

晩年のスタイル

Spätstil

司会：香田 芳樹

「年齢」は人生の節目であるだけでなく、教育・政治・経済といったさまざまな分野で社会を規定する重要な要素でもある。しかしながらそれが文学研究の課題とされることは稀である。本シンポジウムは Gerontologie (老年学) の視点から、年齢と芸術の関係、あるいは加齢と創造性の問題を解明しようとするものである。

「老年」あるいは「老化 Altern」は、西欧精神史において両極端の評価を受けてきた。一つはキケロの、「徳の涵養が、老年に驚くべき果実をもたらす」(『老年について』) に代表される、よく生きる人生の集大成として老年があるという立場と、もう一つはボーヴォワールのように、老年を「過去と現在の偶発的選択」と考える立場である(『古い』)。後者の悲観主義を前者によって克服するために、社会は様々な努力を払っているが、そのためには科学のサポートも不可欠である。

老年学はエイジング aging と読み替えられて我々にも身近なテーマであるが、社会の高齢化が進む中、医学や心理学はもちろん、文系科学でも倫理学や法学の分野では無視できない研究分野となっている。近年米国を中心に老年学を文学研究にも取り入れる試みがなされ興味深い成果を上げているが、文献学と解釈学から発展したドイツ文学研究はこうした取り組みに遅れている。それは老いという肉体的現象を精神の産物と同列に並べることに對する根強い抵抗があるからである。本シンポジウムはその抵抗を軽減することを意図している。

文化的老年学は個人のフィジカルな能力を問題にするのではない。Th. マンもヘッセも加齢とともに大きく創作スタイルを変えたが、これはサイドがベートーヴェン論で述べたように、「芸術とはそれが出現した時代の一部」(『晩年のスタイル』) であり、変化する時代が彼らに必然的にスタイルの変化を要求したからだといえよう。しかしこれは老年が時代に迎合するということではない。晩年性(lateness)の考察に重要な視点は、サイドが言うように、それが「時代とのつながりを拒否しつつも…手ごわく難解な美的精神のありか」(同) であることである。個人の時間と時代の間の遅延関係(lateness)、つまり置いていかれることを逆に強みとすることこそ、作家の晩年のスタイルを決定する要素な

のである。創作の終わりを受け入れるために、作家は最終的な着地点を見定めてそこに自己を投企せざるを得ないのであり、それは同時に時間を越えた、芸術の永遠性に接続する唯一の方法だといえる。

シンポジウムは、研究分野と時代を異にする4名の報告者によって、「晩年に書くこと」と「晩年を書くこと」の創作活動への意義と問題性を多角的、かつ批判的に検証するものである。

1. 「よちよち歩きの時分から柵のところまで」

—ヨーロッパ中世における老年描写

香田 芳樹

中世文学において作家、あるいは登場人物が演じる「老い」には、1)身分的、2)叡智的、3)ジェンダー的なストラテジーがある。老いを纏った叡智と若きエロスの対立、あるいは協働が作り出す緊張関係は西欧文学の古典的テーマである。また老賢者はその集合的叡智(Witz, Vernunft, Bescheidenheit)によって、一方では叙事詩においてしばしば若き英雄の知恵と対決し、他方では老女に代表される狡知(List, Kunst)と歴史的に対立した。発表の前半では、こうした老熟の思想が『ヒルデブラントの歌』(800年頃)、ミンネザング、オスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタイン(1376-1445)の詩にどのように描かれているかを考察する。

発表の後半では、晩年、あるいは老いを意識の問題として捉え、それが文学的・哲学的に主題化されるメカニズムを解明する。晩年的叡智が経験知と異なるのは、それが始まりと終焉を意識した歴史作用の産物だからである。本来は誕生も死も知らない生が時間意識と出会うことで、生は世界に「意味づけ」を行おうとする。このことを H. ブルーメンベルクはハイデガーの存在論を批判する文脈で、(In-)Kogruenz von Lebenszeit und Weltzeit と呼んだ。本発表ではこの定式を文学創作に応用し、戦乱や生老病死によって中世作家に芽生えた歴史意識と、それへの個的生の接合に晩年思考の発端があることを論じたい。

2. 自己と向きあうゲーテ—若返りと老いの物語

山本 賀代

ゲーテの晩年は長く多産であるが、晩年の創作活動に対する評価は生前も死後も曖昧であった。『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1821/1829)の断片的・モザイク的な作品構成は長らく構造上の欠陥とされ、20世紀半ば以降、

ようやくその独特な「晩年のスタイル」が注目されるようになった。この最後の小説の完成をはじめ、晩年のゲーテの創作全体を支えたゲーテ・アルヒーフの誕生（1822）は、自伝的著作の計画とその挫折にも深く関わっている。50歳を目前に自己の一貫性を求めたゲーテは、60歳で自伝に着手し、70歳を超えてその幻想を自ら破壊する。

老年に関するゲーテのアフォリズムには、老いを死の前段階ではなく生の一部として考察する視点が顕著であるが、老年学的観点からゲーテの晩年を扱う研究はまだ少ない。本報告では、ゲーテの描く具体的な老いの文学形象として、『遍歴時代』に挿入されたノヴェレ『50歳の男』の主人公を取りあげる。50歳とは老いを意識する過渡期として利用された年齢であり、物語はその1年間を描いている。しかしこの小品の成立期間は20年以上におよび、『遍歴時代』の改作に呼応して物語の重心も移動した。つかの間の若返りを体験した男は結局は老いを受け入れねばならないが、そこに「一点の暗い陰りもない」調和的な老ゲーテのイメージはなく、物語は小説のなかで諦念に対する諦念を主張するかのようである。

3. 「ヴァイオリン協奏曲ニ短調」にみるローベルト・シューマンの晩年様式

船木 篤也

ローベルト・シューマン（1810-1856）の後期作品は、彼の精神疾患が1854年から深刻化したことと一事後的に一結びつけられ、しばしばその「弱さ」や「異常さ」が指摘されてきた。なかでもヴァイオリン協奏曲ニ短調（1853年）は、遺族および関係者がそのように遇し、封印したために、長らく低評価に晒されてきたが、遅くとも1990年代以降、音楽学（M. Struck, R. Kapp等）、演奏界（G. Kremer, Th. Zehetmair等）の双方において、本作を再評価しようという動きが活発化している。本発表はこの動向に沿いつつも、本作にシューマンの晩年様式を見定めるべく、以下の3点を論じたい。

- 1) 「正常な音楽」と「異常な音楽」の区別は不可能であり、精神疾患に根拠を求めて音楽創造の成否を問うべきではない。
- 2) アドルノがベートーヴェンの晩年様式に認めた「常套句」への傾斜という視点が、ここでも有効であろう。シューマンは本作で、歴史的な常套句（例：リトルネロ形式）に明白に依拠している。と同時に、独自の語法（例：同じリズムの執拗な反復）という個人性でもって、それに抗ってもいる。これは何を意味するのか。
- 3) 2016年に公表された本作初演の音源（1937年ライヴ）を参照し、その際に

なされた作品改変の実態を検証する。その改変が、本作を「問題あり」と見なしてきた支配的美学に由来するものだとすれば、そこから逆に晩年のシュティフターの独自性・特異性を照射できるのではないか。

4. スターティング・オーバー

—シュティフター『曾祖父の書類綴じ』最終稿における文化的共同性

磯崎 康太郎

本発表は、シュティフターが死去する数日前まで執筆を継続し、断片にとどまるがゆえに従来の研究ではあまり顧みられなかった『曾祖父の書類綴じ』最終稿を中心に扱い、まず以下二点について論じる。1) 物語の主人公たちの人生行路は同作品の作者晩年の稿において自伝的傾向を強め、シュティフターの伝記的事実と合致する部分が増している。だがその一方で、それ以前の稿に比べて、2) 人間関係の構築とその横の広がりが増し、貴族や市民や召使といった階級差を超えた人間関係が形成され、動物や植物をもその圏内に含めようとする、いわば生命圏平等主義とも言うべき世界が志向されている。自伝的傾向の強まりは、作者の個性や主体性の発現とみなすことができるが、これが英雄視のもとで扱われるのではなく、むしろこの作者性を周囲のコンテクストのなかに埋め込み、新しい共同体世界を形成しようという意図が認められる。この傾向は、シュティフターが自伝としては唯一最晩年に記した断片「わが生命」のなかにも認められるものであり、スターティング・オーバー、「晩年」という作家の幕引きに含意された、新たな世界の幕開けとして描かれている。文学の社会的役割が問題視された 19 世紀中葉において、晩年のシュティフターは恵まれた作家生活を送ることができたとは言い難いものの、しかしさまざまな束縛から解放され、老年に不思議な「若返り」を見せた作家の例となる。

中世文学における身体描写の逆説的レトリックを巡って
**Zur paradoxen Rhethorik der Körperdarstellungen
in der mittelalterlichen Literatur**

司会：伊藤 亮平

中世文学における身体描写については、その表現方法に近現代文学とは異なる独特の暗喩的な手法が用いられることが多いのではないかという疑問が、本シンポジウムにおける議論の出発点をなす。たとえば、ゴットフリートの『トリスタン』に描かれる愛の精神性と即物性の境界線の曖昧さは既に長いこと同叙事詩の研究において指摘されてきた。観念性を強調するかのような叙述の裏には、実は豊穡な肉体的官能イメージが隠れている。同じ構図は、ゴットフリートへの影響が指摘されてきたラインマル・フォン・ハーゲナウのミンネザングについても言える。つまり、抽象的な婦人描写は決してその身体的魅力の乏しさの反映ではなく、むしろ暗喩的に身体の魅力を受容者に印象付ける、という構図である。

実はこの類の「逆説的レトリック」は恋愛物語における愛の様相の表現にのみ見られるものではなく、そもそも中世文学の身体描写全般について特徴的な傾向なのだと言ってもあながちの外れではない。そのことを示すために、上述したミンネザングの伝統とその革新、および『トリスタン』について考察することに加え、ヴォルフラムの『パルツィヴァール』、さらに15世紀のヴィッテンヴィーラーの『指輪』において看取される「逆説的レトリック」を検証する。例えば、『パルツィヴァール』においては一見すると宗教的な救いから距離がありそうな「罪深き身体」を有しているはずのフェイレフィースの子供がキリスト教国の創立者になるという伝説が生まれるのに対し、彼の異母弟で宗教的に「瑕疵の無い身体」の持ち主であるパルツィヴァールの息子ロヘラングリーンが逆の結末をたどるという過程に「逆説的レトリック」が看取される。身体の罪と報いの因果関係には、表面上の描写では推し量れぬレベルの価値の逆転が存在するのではないか。『指輪』の既存の価値観を揶揄し相対化するかのような、滑稽でありまた辛辣でもある人物描写、さらにはモラルを欠くかに見える性的な身体描写も、単なる下卑た作風のエンターテインメントと切り捨てるべきではなく、むしろ社会の担い手として自意識を強める市民たちによる、真剣な社会意識と既存の秩序の解体を通じた新しい時代の人間像・身体イメージの構築であると捉えられる。

さて、かくも微妙な身体描写の「逆説的レトリック」は、身体表現・人物表

現を社会的圧力ゆえに抑制せざるを得ず、故に暗喩に頼らざるを得なかった中世文学固有のものと考えべきなのだろうか？本シンポジウムではこの問題に関して、近代における中世文学受容についても考察を広げる。山崎発表ではリヒャルト・ヴァーグナーの独特な心的態度について取り上げ、彼が中世文学素材を自分独自の世界観を表現するために如何に受容したかが考察される。それにより、「身体描写の逆説的レトリック」が中世から近代にまで系譜的に受け継がれ一般化された技法でありながら、その使われ方が時代時代によって変遷するものであるということも明らかになる。

1. ミンネザングにおける身体描写

伊藤 亮平

婦人奉仕の理念を説く典型的なミンネザングでは、女性の美が再三語られる。しかし、女性の身体描写は具象性に乏しく、「赤い唇」、「輝く瞳」、などの定型化された表現によって賛美されるにすぎない。ミンネザングの抽象性や具象性の乏しさは先行研究においてしばしば指摘されてきた。

しかし身体描写の抽象性は、使用語彙や表現の乏しさを表すのではなく、女性の美は言葉では表すことができないという逆説的レトリックが反映されたものである。敢えて具象性を控え、抽象的に女性を描写することは、手が届かないゆえに尊い貴婦人の魅力的な姿を聴衆に印象付けるレトリックと言える。

モールンゲンやヴァルターが用いた、女性の身体を詳述することで女性を賛美する技法は、それまでラインマルに代表されるように女性を抽象的に描くミンネザングの伝統を逆手にとった新たな試みであった。

身体の具体的描写は、後期ミンネザングのパロディー的描写にも引き継がれた。例えばナイトハルトのリートでは、歌謡の舞台を宮廷から農村に移し、登場人物の女性について、「良い娘だが、足にあかぎれがある」など、美の欠損が描かれる。これは一見すると農村社会の蔑視、婦人奉仕のアイロニーである。しかし本発表では、パロディー化された貴婦人の身体描写、すなわち美の欠損によって、肉体性が強調され、結果的に身体的魅力が印象付けられるという、逆説的レトリックの美学的伝統が強調される点を主張したい。

2. 我は生きながらにして死せる身なり(ich bin mit lebendem lîbe tôt.)

— 『トリスタン』における生と死をめぐる逆説的レトリック—

渡邊 徳明

モーロルトとの戦いで負傷したトリスタンは、体から腐臭を漂わせ、容貌は醜く変化した。治療のため偽名を使いダブリンに潜入した彼は宮廷へと運びこまれ、そこで *ich bin mit lebendem lîbe tôt.* (7784) と王妃であるイゾルデ(母)に言う。「私は身は生きながらも死んでいるのです」と。しかし、外見は崩れても、周囲の人々を魅了するその豎琴の音は、彼の存在を知らしめる。そこで上の言葉の真意は、いわば、*ich bin mit sterbendem lîbe lebendic.* (「私は死にゆく身ながら生に満ちている」) ではないか、と発表者は考える。『トリスタン』において、「生」と「死」の関係はしばしば逆説的である。また一般的に中世の世界において「死」は「生」の身近に存在する日常的領域であり、両者の関係は今日ほど明瞭ではなく、そこには別のリアリティーが存在した。

Jan-Dirk Müller は著書 *Höfische Kompromisse* (2007) で、中高ドイツ語の宮廷叙事詩における精神と肉体の緊密な相関を強調する。『トリスタン』の「愛の洞窟」を例に、恋人同士の間で不可視的であるはずの内面が可視化され、可視的なはずの肉体が内面化・精神化される裏腹な相関 (*reziprok*, S.360) が示唆される。そこには近世以降の視覚に依拠する遠近法(中村雄二郎著『共通感覚論』参照)とは違う身体感覚に基づく世界観・価値観があるだろう。恋人同士の物理的な距離は、見えないはずの相手の姿を心に強く現前させる逆説を生む。同じように不可視的な死の世界も、遠近法と無縁な形で、むしろ生に現前するとは言えまいか。

3. 『パルツィヴァール』における異教徒の身体

青木 三陽

13世紀初頭に成立したヴォルフラムの『パルツィヴァール』には、当時のキリスト教社会が知った真の「他者」たる存在としての異教徒が多数登場する。彼らの身体描写を主人公達のそれと比較したとき、最も強調される差異はその肌の色である。例えば西洋の騎士や貴婦人たちの肌は「輝くような白」であるのに対し、異教徒ベラカーネのそれは「夜の闇のような黒」であり、その息子フェイレフィースは「白黒二色の入り混じった」身体であると描写される。

教会のイデオロギーに支配されたかつての文学、例えば武勲詩においては、黒い肌を持つ人間とは悪魔の代名詞であり、殲滅すべき存在であった。『パルツ

『イヴァール』においても当初、黒とは「悪魔の色」であり、白は「神の色」であると言明されるのだが、物語が展開するにつれ、身体に投影される両者の関係性はしばしば逆説的なものとなっていく。特にエピローグにおいて、フェイレフィースの子孫が東方に巨大な「司祭ヨーハン（プレスター・ジョン）の王国」を築くのに対し、パルツィヴァールの息子ロヘラングリーンが西洋の一キリスト教国を救済するのに失敗するというエピソードは、上記の価値観を問題化するものと言えよう。ヴォルフラムが作中で俗人としての立場を強調することは研究史の中で常々指摘されてきたが、ベラカーネやフェイレフィースの身体には必ずしも教会による支配を受けない当時の生々しい異教徒像が投影されているのである。

4. 身体描写と笑い

嶋崎 啓

15世紀初頭のヴィッテンヴィーラー作の叙事詩『指輪』では、主人公ベルチが恋い焦がれる女性メツリは「喉にこぶが垂れ下がり、お腹の前に達している」とか、「背中が突出している」といったように奇妙な身体を持ち主として描写される。そのグロテスクとも言うべき非現実的な身体描写が笑いを目的としていることは明らかだが、その笑いが何を指しているのかは分かりにくい。そもそもグロテスクな身体描写は笑いよりもむしろ恐怖を抱かせる場合もあり、また、多くの喜劇が奇異な容姿よりはむしろ行為の不調和によって成り立つことを考えれば、異様な身体描写と笑いとの結びつきは必然ではない。

ヒロインのメツリは他にも例えば「口は海の砂のように赤い」と描写されるが、この表現のおかしさは、第一に、「口がルビーのように赤い」という中世の宮廷文学に見られる表現のパロディーであるという知識を前提とし、第二に、「海の砂のように」という喩えと「赤い」が矛盾するという理解を必要とする。村を舞台とし、農民たちの野卑な姿を描いた『指輪』は謝肉祭劇やナイトハルト劇と関連づけて論じられることがあるが、謝肉祭劇が農民に扮した市民の劇であって、土俗的な世界をそのまま体現しているわけではないように、『指輪』も民衆的な世界を描きながら、あくまで高い教養を要求する風刺文学として読まれねばならない。

5. ワーグナーの楽劇におけるグノーシス的快樂の身体性について — 『トリスタンとイゾルデ』と『パルジファル』を手がかりに

山崎 明日香

本発表は、作曲家リヒャルト・ヴァーグナーの楽劇で造形された登場人物の身体性に注目し、そこに反映されたグノーシス的世界観によって、中世素材の「逆説的レトリック」が継承され機能していることを検証する。グノーシス主義に見られる二元論的星辰観、禁欲と放縱の人間論的二極性に含まれる矛盾は、作品内で純化された快樂の肉体として表象される。このパラドキシカルな身体は、公共圏を支える市民道徳や、私的空間での性産業、さらに既存宗教への対抗文化的な制作物として象徴される。だが、中世と近代を媒介するこの快樂の美的身体は、素材理念のフレーム化を推進し、商業主義的な芸術受容を可能にした。

ヴァーグナーの両作品については、キリスト教的またグノーシス的世界観の複合性が検証されているだけでなく、そのプラトニック／エロティックな対照的世界観が議論されてきた。本発表はこうした先行研究に加え、19世紀の身体性と快樂の問題、同時代のグノーシス的世界観とその芸術受容についての研究を参照する。

登場人物の肉体性を排した理念的で崇高な快樂の身体性は、同時代の物質主義的な快樂の価値観を問題化する。ここには中世のアナーキズムの伝統を継承しつつ、消費不能な快樂の身体性が構築されている。こうしたヴァーグナーの試みは、中世復古の潮流の中で、中世素材の理念化を推進しただけではなく、世紀末に至る商業主義的デカダンスを形成する美的な身体モデルを提供した。

Erinnerungsliteratur nach 1945.

Medien, Kontroversen, Narrationsformen

Moderator: Markus Joch

Seit 1945 scheint im deutschen Kontext die Vergangenheit stillzustehen, versteht man unter ihr doch nach wie vor die NS-Ära mit der Shoah im Mittelpunkt. Gegenüber späterer historischer Erfahrung („1968“, „Wende“) zeigt sich diese Zeit stabil, insofern wie selbstverständlich sie es ist, die mit „deutscher Vergangenheit“ vorrangig assoziiert wird. Doch hat sich das Verhältnis der fortlaufenden Gegenwart zum Gravitationszentrum historischer Erinnerung verändert. Immer weniger Autoren und Leser verfügen über eigene, „primäre“ Erinnerung an die Schreckenszeit, immer mehr nur über „sekundäre“ – an die Erzählungen Betroffener und mediale Vermittlungen. Erinnerungsliteratur lässt sich also danach unterscheiden, ob sich das erinnernde Ich einem erinnerten Ich gegenüber sieht – der Autor als Zeitzeuge – oder aber Angelegtem, Gehörtem, sekundär Gesehenem. Das Symposium spürt den Effekten nach, die diese Teilung in der deutschen Literatur nach 1945 gezeitigt hat.

Das Erzählwerk W. G. Sebalds verdankt seinen Erfolg nicht zuletzt dem Umstand, dass es, wie kein zweites um 2000, auf die Imaginationsauslöser abhebt, der sekundäre Erinnerung bedarf. Dabei betont der Vortrag von K. Kawashima, dass Sebald die Medien seiner Shoahliteratur dehierarchisiert – G. Agambens Privilegierung des Zeugen vor dem Archiv ist den *Ausgewanderten* und *Austerlitz* fremd. Ein zweiter Effekt sind Misstrauensbekundungen gegenüber Trägern primärer Erinnerung. In diesem Zusammenhang ist Sebald als Kritiker von Alfred Andersch vorzustellen, dessen Autobiographie von 1952 er 1993 als Beitrag zur Verhüllung der Wahrheit im NS attackierte. M. Joch hält die Polemik gegen den Mitbegründer der Gruppe 47 teilweise für vertretbar, weil dieser tatsächlich zur Selbstverklärung neigte, betont aber zugleich, dass Anderschs extrem selektiv verfahrende Erinnerungen fast harmlos anmuten, vergleicht man sie mit den massenmedial verbreiteten Selbstverniedlichungen eines Gottfried Benn. Sebalds Aversion gegen die Gruppe 47 sollte im Übrigen nicht darüber hinwegtäuschen, dass um 2000 bestimmte Narrationsformen von Autoren verschiedener Generationen geteilt werden. Auch das Erzählen des späten Günter Grass interessiert sich für die Vermittlungsvorgänge, die uns Vergangenheit zugänglich machen. *Im Krebsgang* stellt den familialen Rahmen sekundärer Erinnerung ins Zentrum. Wie Y. Hayami zeigt, verweist der un gute Verlauf, den die Tradierung eines deutschen

Schiffsuntergangs im Gedächtnis der fiktiven Familie Pokriefke nimmt, literaturgeschichtlich zurück auf ein Motiv in Kleists *Penthesilea*: Familiales Erinnern an eine traumatisierende Katastrophe sorgt, wenn fehlgeleitet, für eine zweite Tragödie.

1. W. G. Sebalds Archiv und Zeuge

Kentaro Kawashima

Als Autor der zweiten Nachkriegsgeneration stützt sich W. G. Sebald auf Archive und Zeugen, um katastrophale Vorgänge im Dritten Reich, die er selbst nicht erfahren hat, zu erzählen. Seine Erzählungen dienen daher als Prüfstein für die Theorie von Archiv und Zeuge, die Giorgio Agamben in *Was von Auschwitz bleibt* konzipierte. Agambens Problematisierung des historistischen und diskurs-analytischen Begriffs vom Archiv geht mit seiner dezidierten Akzentuierung der Relevanz des Zeugen einher. Grundzüge dieser Theorie werden von Sebalds Erzählliteratur geteilt: Sebald problematisiert wiederholt Archive, die zwar eine notwendige, aber keine hinreichende Bedingung für die Erinnerung an die Katastrophen darstellten. Außerdem ist Sebald mit Agamben in der Einsicht einig, dass der Zeuge gleichfalls nicht imstande ist, die Katastrophen gänzlich wiederzugeben: Der Zeuge spricht einzig im Namen eines Nicht-sagen-Könnens. Die ganze Wahrheit der Katastrophe ist also sowohl für Agamben als auch für Sebald weder mit dem Archiv noch mit dem Zeugen wiederherzustellen: Es bleiben immer Reste. Sebalds Literatur beleuchtet jedoch ein Problem der Theorie von Agamben. Demonstriert er doch, dass archivierte Medien auch als Zeugnisse im Sinne Agambens fungieren können. Er stellt somit die kategoriale Unterscheidbarkeit von Archiv und Zeuge in Frage.

2. Grenzen der Wahrheitsliebe. Selbstdarstellungen nach 1945 (Andersch, Benn)

Markus Joch

Alfred Anderschs autobiographischer Text von 1952, *Die Kirschen der Freiheit*, erhebt einen forcierten Wahrheitsanspruch, doch verfährt die Rückschau auf des Autors Verhalten im Nationalsozialismus absichtsvoll selektiv. In den Vordergrund spielt der „Bericht“, was sich in der Gruppe 47 gut macht: die Desertion vom Juni 1944. Ausgeblendet wird dafür der Anpassungskurs gegenüber der Reichs-schrifttumskammer in den Jahren 1942/43. Der Programmierer der ‚Jungen Generation‘ im literarischen

Feld Westdeutschlands erwirbt symbolisches Kapital auf Kosten der Wahrheitsliebe. Ein ähnliches Bild bietet sich beim renommiertesten Vertreter der Inneren Emigration. Gottfried Benn, belastet durch seinen Temporärfaschismus von 1933/34, betreibt retrospektive Selbstverklärung zunächst in der Autobiographie *Doppelleben* (1950), um sie unmittelbar danach auf die Spitze zu treiben. In einem Rundfunkgespräch suggeriert er eine Nähe der eigenen Person zum Widerstand im NS. Zu achten ist (in der kritischen Perspektive Pierre Bourdieus) auf die massenmedialen Bedingungen, die es Benn erleichtern, die für ihn vorteilhafteste Vergangenheitsdefinition durchzusetzen. Es gibt in der deutschen Nachkriegsliteratur eine intergenerationelle Tendenz zu geschöner Selbstdarstellung; zu berücksichtigen sind allerdings auch die sozialen Zwänge, unter denen Benn und Andersch nach 1945 stehen.

3. Fehlgeleitete Rache. Erinnerung an Gewalt in Günter Grass' „Im Krebsgang“ und Heinrich von Kleists „Penthesilea“

Yoshiko Hayami

Wie ein Ereignis massenhaften Sterbens im kollektiven Gedächtnis behalten, in die Erinnerung zurückgerufen und erzählt wird, hat immer politische Relevanz. Dass Gedächtnis nie das Ganze des Ereignisses erfasst, sondern immer selektiv und dynamisch, setzt Aleida Assmann in ihrer Gedächtnisforschung voraus. Dabei betrachtet sie das Trauma als körperliche Erinnerungsform der Gewalterfahrung. Das Trauma sei eine Erinnerungsform, mit der man eine grausame Erfahrung unerzählt und ungelöst speichert, um sie vor dem Vergessen zu bewahren. In meinem Vortrag untersuche ich die Möglichkeit, dass ein solches Trauma über Generationen weitergegeben werden kann. Günter Grass' Novelle *Im Krebsgang* (2002), die von der Versenkung eines ostpreußischen Flüchtlingsschiffs am Ende des Zweiten Weltkrieges handelt, und Heinrich von Kleists Drama *Penthesilea* (1808), in dem die Gründung des Amazonenstaates der vorausgegangenen Vernichtung durch die Äthiopier zugeschrieben wird, bieten uns Beispiele für Erinnerungsversuche an, die von den Familien getragen werden, die die Opfer der Katastrophe symbolisch repräsentieren. In beiden Werken sehe ich, dass die Versuche fehlschlagen, gewalttätige Ereignisse, die man nicht selbst erfahren hat, durch eine Wiederaufführung der Urkatastrophe am eigenen Leib nachzuvoll-ziehen.

ブース発表Ⅲ（10:00～11:30） D会場（K101 講義室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

多文化社会 EU の理解を重視した、高校における非英語外国語教育導入授業の 試み—東北大学での取り組みに関する中間報告—

藤田 恭子

一昨年度より東北大学では、教養教育改革を目指した 30 件のプロジェクトを進めている。発表者はフランス語、ドイツ語・チェコ語、アラビア語担当の同僚 3 名とともに、プロジェクト「グローバル共生社会の理解を重視した高校における非英語外国語教育導入プログラムの開発—ドイツ語・フランス語導入を通しての多文化社会 EU の理解—」に携わり、ドイツでの取材と教材作成を経て、昨年 12 月に県高等学校での出張授業を実施した。本発表では、中等教育から大学の第二外国語学修への橋渡しを図るプロジェクトの中間報告を行う。

高大接続はグローバル化への対応を意図しているが、議論の中心は入試や英語教育にある。現状でも、中等教育で第二外国語学修への導入がなされることは少なく、多くの大学初年次生は必要な知識や意識の準備がないまま第二外国語学修を開始する。そこで発表者のチームは、第二外国語学修の意義を理解する契機を、高等学校の生徒に提供する試みを開始した。その際、学修の動機をもつばら「民族」や「国民文化」のイメージに接合させることは、グローバル化社会にそぐわない。EU 各国の多文化性を意識させ、日本の問題にも視野を拓けうるプログラムとして、ドイツおよびフランスの難民受入れを取り上げた。それにより高等学校の社会科との連携も可能となっている。

本発表では、ドイツ語に接した経験のない高等学校の生徒たちに多文化社会ドイツの一面を伝えつつ非英語外国語に触れるという出張授業の成果および今後の課題について考察する。